

のうしゆ  
「子宮筋腫」「卵巣嚢腫」

「流産」  
女性の悲しみを乗り越えて、  
「うどん県」「佐世保バーガー」  
「ひこにゃん」で地方を元気に!



地域起こしの達人  
PRプロデューサー  
殿村美樹さん(53)

シリーズ人間

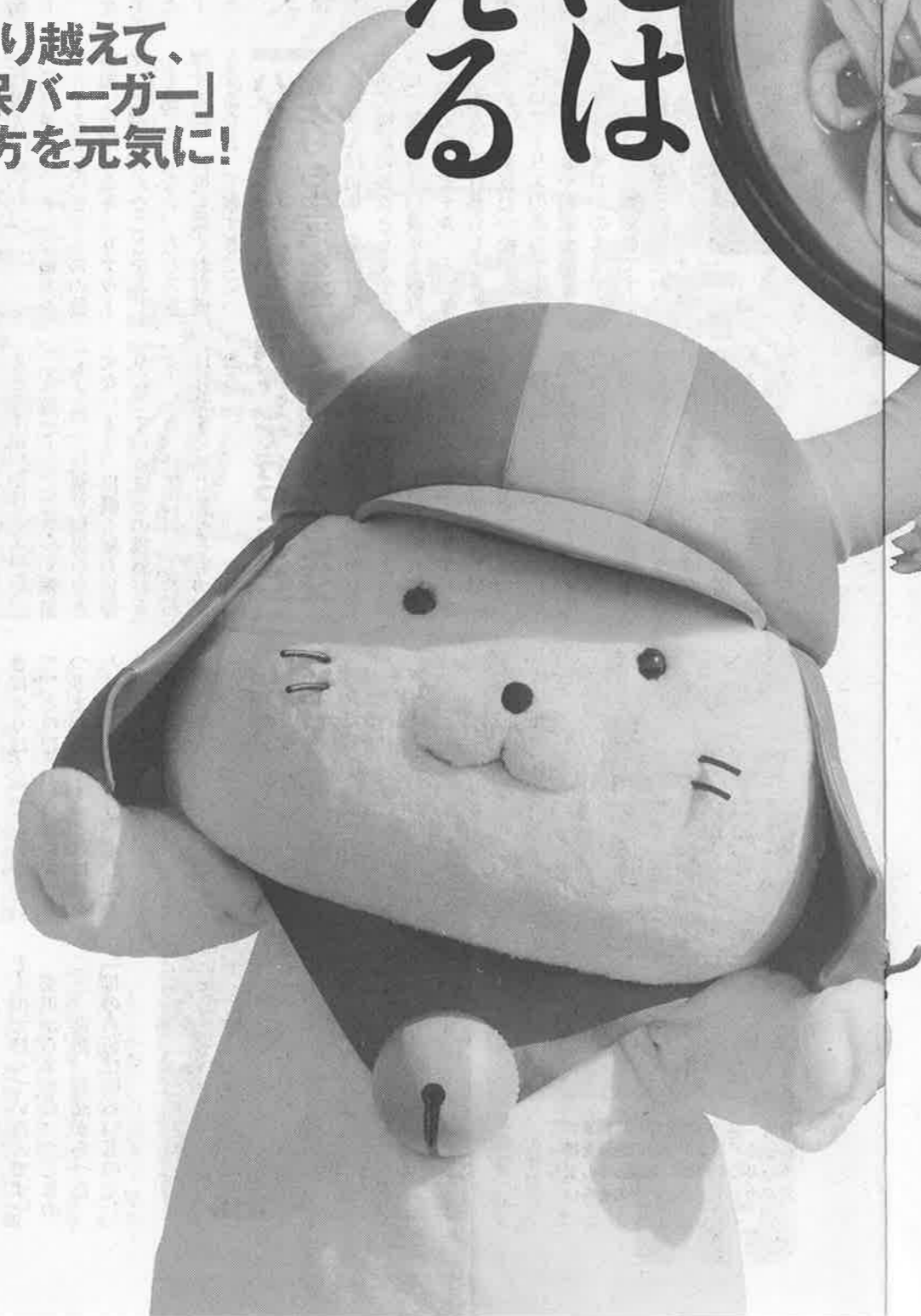
No.2194  
題字 / 武田双雲

(63) 女性自身

女性自身 9月23日号「シリーズ人間」

この記事は編集部の許可を得て公開しています。

私には  
見える



原点は、たった一人の家族、ともいえる父の  
「売れない絵、をいかに売るか」。  
日の当たらないものに注目を集める面白さに  
とりつかれ会社を起こしたが、それは周りが  
「自殺行為」というほどの苦行の始まりだった。  
「情報はタダ」とお金を払わない業者。  
よその魅力を伝えるむずかしさ。それでも  
殿村さんは衰退する地方の「宝物」を掘り起こす  
ために、今日も日本中を飛び回っている。

埋もれた宝が  
いっぱい

ひとりの若い女性が、気でも失ったかのように新幹線のシートで眠っていた。大阪から九州方面へ向かう山陽新幹線。'91年の秋のことだ。  
30歳になったばかりの殿村美樹さんは、20代から持病の子宮筋腫に悩まされていた。2年前には念願の子供をお腹に宿したが、流産。それ以来腹痛が続く、痛み止めが手放せない。  
この日の彼女も体調の悪さを表すかのように、血の気の引いた顔色はファンデーションでも隠しきれなかった。それでも殿村さんには向かわなくてならぬ仕事があった。下腹部に違和感を覚え、目を覚ますと、思わず「あつ」と声を上げた。足元が真っ赤になっている。パンプスを脱ぐと、大量の血がたまっていた。乗務員を呼び止めて汚してしまったことをひたすら謝り、シートをぬぐう。  
このところ貧血続きでヘモグロビンは基準値を大幅に下

(62)

# アリス

藤野

た。「美樹ちゃん、私、病院にいたよ。今からあなたの弟か妹を産むの。だから帰れないのよ」。私のことをあざ笑っているかのような口調が

耳の奥から消えていせん」母親からの電話のことは誰にも言えなかった。妹にだけ「おかあさん、もう帰ってこないと思うよ」と告げた。「生活が苦しいうえ、学校ではじめられるようになり、いつも自殺することばかり考えるようになっていました」殿村さんをおばちゃんだった。「とほと歩いている」と「美樹ちゃん、どうしたの」と笑顔で声をかけてくれました。すがり付くような目で見ていたのでしょうね。「いつでも店にいらっしやい、お手伝い

ちがビツクリすることもあるくらいなのだ。従業員信貴啓子さんは証言する。「裏表のない人で、社内でもまったく雰囲気は変わりませんよ。特技は四つ葉のクローバーを見つけたこと。原っぱがあると、すぐに分け入って数分で発見。営業先の顧客に手渡して相手を笑顔にしてしまします。あと動物を見かけると必ず追いかけてますね笑」大阪でともに暮らす愛猫「ちくわ」に寂しい思いをさせないよう、出張も極力日帰りしているほどの動物好き。その一方、仕事に対する情熱は狂気すら感じさせるものがある。

「母に恋人ができたらしい」とに父も気づいたようで、両親の口論が絶えないようになってきました。私はいつでも仲裁を入れるよう、帰宅する母の足音に聞き耳を立て、深夜まで眠れぬ毎日でした」小学5年生の夏のこと。母親は家を出ると言いました。「私は小さな声しか出せない気弱な子供でしたが、そのときばかりは大声で「行かないで」と叫びながら母にすがりつきました。すると母は私をハイヒールで蹴り飛ばし、「あ

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし



街中で突然踊りだすという、高円寺商店街でのプロジェクト「阿波おどりフラッシュモブ」にて徳島市のゆるキャラ・トクシと談話

「父は大正生まれで、男の人が台所に立つなんて考えられない時代には育った人。『買い物に行くのは恥ずかしいな』と言いながら、食事の用意をしてくれました。もともと見よう見まねで覚えた料理なので、味噌汁にはダシが入っていないかったんですけれど」子供のために絵画一本の生活を支えられた父。殿村さんも家計を支えるため高校時代からバイトを掛け持ちし、奨学金で大学に進学する。「それでも父の収入は不安定でしたから、働かざるをえません。早朝4時に豆腐店に行き、その後は病院で受付業務。午後はハンバーガー店で接客し、夜は家庭教師というローテーションでした。1日4つもかけ持ちすると頭がこんがらがって、ハンバーガー店で『ありがとございませう』と

言うべきところ、「お大事に」と口を滑らせ怒られたことも。夏休みは新幹線の売り子やバスガイド。合計30種類のバイトを経験しています」卒業後はアルバイトをした時期もあったが、首尾よく大手広告代理店に入社することができた。その翌年には結婚し、ほどなく子会社のPR会社に転職することに。このPRという仕事との出会いが彼女の人生を大きく変えることになる。「父が絵を描くことだけで生活できたらどれほど素晴らしいだろうと、ずっと思っていました。仕事していくなかで、メディアに取り上げてもらったことにより、消費者に商品や会社を好きになっていただく方法がある」と知ったのです」殿村さんはこのノウハウを

「記事を書いたのはあんたやないやろ、なんで費用を払わなあかんねん」父親の絵を売るべくPR会社で独自の手法を模索していた殿村さん。新しく来た上司と考えが合わず、3年目の'89年に会社を飛び出してしまっ。パブル全盛期だったことが幸いし、フリーで仕事を始める殿村さんにも、大手企業からのPRの依頼は途切れなかつた。大阪日日新聞取締役の畑山博史さんは当時の殿村さん

「僕はそこそこ、毎日新聞の社会部にいたんですけれどもある日、受付から『記者に書類を渡したいという方が来ている』と連絡が入り、若造だった僕が下りていった。事務の女性が届け物に来たのかと思っていたら、物おしせずプレゼンをはじめられ、驚いたものです。殿村さんは誰がど

「母に恋人ができたらしい」とに父も気づいたようで、両親の口論が絶えないようになってきました。私はいつでも仲裁を入れるよう、帰宅する母の足音に聞き耳を立て、深夜まで眠れぬ毎日でした」小学5年生の夏のこと。母親は家を出ると言いました。「私は小さな声しか出せない気弱な子供でしたが、そのときばかりは大声で「行かないで」と叫びながら母にすがりつきました。すると母は私をハイヒールで蹴り飛ばし、「あ

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし

回っていた。常時、水をなめてしのいでいる。それでも彼女はとまれない。「行かないや」受けた仕事は北九州市のテーマパーク「スペースワールド」のPR。ピンチになればなるほど死にもぐるようになってしまっ自分があった。ろくな食べ物さえなかった小学校時代の記憶がそうさせるのだろうか。父への思いが原動力なのか。何がこれほど自身を仕事へ駆り立てるのか。地域起こしの達人として今やひっぱりだこである殿村美樹さん(53)の若き日のひとコマだ。現在はPR会社「TMオフィス」の代表取締役としてスタッフ20人を率いる。PR業とは、商品やイベント、新規にオープンした施設などの情報をマスコミにとりあげてもらえるよう働きかける仕事である。しかし、殿村さんはその枠に収まらない。地方に眠っているお宝を発掘し、ブームになるよう仕掛けをつくる。手がけた案件はこれまでに2千500件。「佐世保パーガー」「ひこにゃん」「うどん県」など誰もが知っている全国的なムーブメントを巻

き起こしている。これほどの成功を収めながら、本人はいたって謙虚だ。「よその会社が見向きもしないところを細々とやっているだけです」その語り口は京女だけあって、はんやりとしたもの。人口減で消滅する自治体もあるという予測も出るくらい「地方冬の時代」。アベノミクスの効果も日本の隅々までは及んでない。殿村さんは、そんな地方をPRする難しいビジネスの最前線で活躍するキャリアアウーマンだが、そんなことをみじんも感じさせない。むしろ挨拶する際、何度も深くお辞儀をするなど、丁寧すぎてこっ

ハイヒールで私を蹴飛ばして行った母と絵よりも生活を選んで見捨てなかつた父殿村さんは61年、京都府宇治市に画家の長女として生まれた。父親より13歳年下の母親は父の絵のモデル。ふたりは九州から駆け落ちしてきた。妹との4人家族だった。「広いアトリエのある平屋の家には音楽家や画家が集まってきたいてサロンのようでした。みなさん芸術家肌ですから、表現することにこだわり

「母に恋人ができたらしい」とに父も気づいたようで、両親の口論が絶えないようになってきました。私はいつでも仲裁を入れるよう、帰宅する母の足音に聞き耳を立て、深夜まで眠れぬ毎日でした」小学5年生の夏のこと。母親は家を出ると言いました。「私は小さな声しか出せない気弱な子供でしたが、そのときばかりは大声で「行かないで」と叫びながら母にすがりつきました。すると母は私をハイヒールで蹴り飛ばし、「あ

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし

んたなんかいらぬ」と言い残して行ってしまったんです」妻の出奔に意気消沈した父親は絵を描く気力を失い、生活にも事欠くようになる。この年の父の年収は50万円。庭に植えたヨモギや三つ葉を調理したり、見かねた父の師匠の差し入れなどで食いつなぐ。「それでも母は戻ってくる信じませんでした。4歳下の妹と一緒に千羽鶴を折り、ずっと玄関で待っていたんです」家出から半年たったときのこと。突然、電話があった。「母の声色は明るいものでし



自宅に遺された父の絵に囲まれて。具象画であるが独特の色彩を持っているのが特徴。急逝してしまつたためサインがないものも多い



'86年、父とともに京都の浄瑠璃寺へドライブ。酒を飲まず、人づきあひもヘタだった父は片時もスケッチブックを手放さなかつた

# リズ間

容は「うちはお金がありません。自慢できるものもひとつもない。このままではじり貧なんで、なんとかしたいんです」という控えめなものばかり



「山陰地域では出雲大社こそオンリーワンの強みを持つ存在。御利益のある神話の国の物語をどう演出するかが観光PRのカギ」と語る

り。実際に訪れてみると、素晴らしい商品や食べ物、風習がたくさんある。ただ、それは誰にも気づかれない。ひっそりと存在している。寡黙で売り込みのヘタだった父の姿と重なっているように見えたんです。父を有名にすることはできませんでした。でも、すでにあるものに、違った角度で光を当てるといってPR手法を苦しんでいる地方に活用できるんじゃないかと思うようになってきたんです。地方PRの事業も軌道に乗ったと感じていた04年、43歳になった殿村さんの人生に激

震が起こった。18年間連れ添った夫と別居することになったのである。「結局、子供を産んであげられなかったから?」。そんな思いも心をよぎった。2年後に離婚するが、その心労から卵巣腫瘍を発病する。「簡単な手術だから1週間ほどで退院できると言われていました。ところが6日目に傷口から血が漏れている。大勢のドクターが走り込んできて、そのまま緊急手術。6時間の手術の後に目が覚めると人工肛門がついていました」

研修医に施術をさせたところ、誤って大腸を傷つけてしまい壊死していたのだという。明らかな医療ミスだが、病院側は非を認めようとしなかった。「1カ月後に退院しましたが、人工肛門はつけたまま。妹と医療ジャーナリストに教えてもらい、薬にもすがらないで、たどりついたのが奈良県にある健生会土庫病院の稲次直樹先生でした。「大丈夫、僕が治します」と言って再手術してくださったんです。ところが開腹すると、腸は癒着だらけ。剝離するため懸命に努力してくれましたが、今度は腸液を外に出すための管をつけることになったんです」

入院生活は長引いた。顧客へのプレゼンや打ち合わせ、企画書の作成から銀行との交

んな欄を担当しているか細かくリサーチしたうえで、どうすれば取り上げてもらえるか考え抜いていました。当時、大阪でそんなPRをしている人はいませんでした。がむしやりに仕事に打ち込んだこともあり、業況は順調に推移。30歳だった92年1月に法人設立の運びとなる。もともと先駆者としての苦労は並み大抵のものではなかった。女性起業家など物珍しい時期だっただけに、結婚指輪をしていただけで、「旦那さんの仕事を手伝っているの?」と軽くない言葉が飛ぶ。PRという業種自体に対する無理解にも苦しめられた。「あるメーカーから依頼を受け、多くのマスコミに報道してもらい、その対価を要求しました。すると、『記事を書いたのはあんなやないやろ、テレビ番組を作った人もあんなやない。なんで費用を払わなアカンねん』と返されたんです。がめつい大阪の商人は形のないモノになかなかお金を払おうとしません(笑)」

一番の近道でした。記者と仲間よくなって、記事を書いてもらうよう働きかけたところ、「まず個展を開いてくれないと書きようがない」と言う。父に話すと、よりいっそう熱心に制作に励むようになり、心にも制作に励むようになり、急逝してしまつたんです。68歳でした。しばらくは放心状態で……。生活を支え合つた、たった一人の家族みたいなものでしたから。体の不調にも悩まされるようになると、流産の後、異常出血が止まらない。「医師には『よく生きています。命が惜しかったら子宮を取る時期だ』と言われてしまつて。もう子供は産めないだろうなど覚悟はしていましたが、やはり女ではなくなるのかなと思うと寂しくてね。旦那に悪いなとも感じました」

さつそく、これをPRしようという提案。しかし、米軍基地の兵士の奥さんが家庭の軒先で売っているハンバーガーは、市民が気軽に食べるものだった。あまりに日常に溶け込んでいるため、役所の反応は今ひとつ。「日本の日常に溶け込んでい

ません。これをPRしたいと言っていると、地元タウン誌が作った「恐るべきさぬきうどん」という本を手渡ししてくれました。早速、プレスリリースを制作。50社ほどの新聞が集中的に報道してくださり、記事を読んだテレビ番組がやって

きた。ディレクターが「動きのある店はありませんか?」と言って、田園のなかにポツンとある小さなうどん店をチョイスし、紹介したところ、火がついたんです。のちの「うどん県」に発展する大きな成功体験だった。

居ても立ってもいられなくなった殿村さんはひとつの決断をした。前出の高橋さんはお見舞いのため病院を訪れた際の驚きを次のように語る。「殿村さんが企画・プロデュースし成功させた、清水寺で漢字検定協会が発表する『今年の漢字』イベントがあります。年末のそのイベントに、点滴ベストを背負って臨んだと言っています。実物も見せてもらいましたよ。マジンガーZみたいに着せし、上からコートを着てごまかしたって言うんですから驚きました」

「支配人が『佐世保だけはハンバーガーが売れないんだよな。本場のものがあるから』とよく言っていた。一度は食べたいと思っていました」

「これも地元の『日常食』。でも、田んぼのど真ん中にまどうどん店が散らばっているような場所は見たことがあり

「この人も信用できるなど思っていて、いろんなお仕事を頼むようになったんです。当時の表現力はとがっていましたね。今でこそ使



鳥取県の境港さかなセンターでお店の人に話しかける。企画のヒントは街の人との会話のなかにあると交流を欠かさない

鳥取県の境港さかなセンターでお店の人に話しかける。企画のヒントは街の人との会話のなかにあると交流を欠かさない

# リズ人間

支払いや銀行借入金返済のことが脳裏をよぎり眠れない。簡単に切られる立場にあるPR業の寄る辺なさを痛感した。どうして私はこんな事業を始めてしまったんだろう。何度も自分を呪った。持ちこたえることができたのは病院の温かい対応があったからだ。」「旦那とも別居し、誰にも頼れず孤独だったんですけれども、仕事先からベストを着たまま病院へ戻ると、笑顔で『お帰り』と言ってくれる。同じ病室の患者さんは私以外すべて大腸がん。それでも優しく声をかけてくれることにどれほど救われたか」

稲次医師は大腸・肛門科の医師として、奈良県の外れに病院を開設。名医として知られるようになってからも、おごることなく人間そのものを診る真摯な医療を貫いていた。「もともとは、大腸手術では名手として知られていた方で



帝国ホテルで行われた香川県のイベント「さぬきうまいもん祭り」でご当地ゆかりの人物に扮した「うどん県おいでまいキャラバン隊」と

## PRは空気を変える。人を変える。周りの見る目を変える。

すが、あえて出世を追い求めることなく、地域のひと向き合っておられました。こんな愛のある仕事ができるようになりたい、こういうところで生きていきたいと、心から思いました」

発病から9カ月で8回の手術を乗り切った殿村さん。05年に退院後は、全国の自治体から押し寄せるPRの依頼にその地方に合わせた手法丁寧に一から考え、地方の魅力発掘に邁進してきた。

島根県と鳥取県にまたがる5市の参加する中海・宍道湖観光協会会議から企画立案を手伝ってほしいという依頼を受けた殿村さん。米子市で行われた会議の直前、こう語る。「先方は『今年の漢字』のような行事をやりたいみたいなんですけれど、それでは二番

煎じです。『山陰は神話の国。神々のふるさとを主軸に』とメールでやりとりし、PRプランを練り上げました」会議はワークショップ形式で行われた。殿村さんの提案は出雲大社に「新年の干支漫画」を奉納するというもの。地域の大物文化人を起用する

というプランに、年配の男性担当者たちも食いついた。それぞれ市の意見を吸いあげ、粘り強くまとめ上げていく。会合が終わると、出雲大社に行きたいと殿村さんが言い出した。

「以前、お参りに行ったとき、拝観時間が過ぎていたにもかかわらず、もぐりこんだことがあったんです。その後は離婚に病氣と、踏んだり蹴ったりずつとたたりにあつたと思っていました。だから緊張しすぎね。今回で憑きものが落ちるといいんですけれども」

「お金がないのでその代わりに、事務所に大量のじゃがいもや、生きたカニが送られてきたこともありすぎよ」

「東京にいたら、目の当たらない地方の気持ちかわからなくなるような気がして」この国でPRは単なる宣伝と理解されているが、もとはパブリック・リレーションズ

の略語であり、組織とそれを取りまく人間とのよりよい関係を作りあげるノウハウだ。「広告との違いもわかっても、苦勞は絶えませんが、でも私はPRの可能性を信じています。地域で長年名産を作っていた寡黙なおばあちゃん。マスコミが殺到すると、次の日から紅を引くように。地方は基本的には豊かだと思えますが、忘れられるのはつらい。PRは空気を変える。人を変え、その結果、周りの見る目を変えることができる」

忘れられるのはつらい。これは母親に捨てられた経験のある殿村さん自身の心の叫びでもあるのだろう。今後の人生設計について尋ねてみると、意外なくらい動揺した。「えー、考えたこともないです。のんびりしたいような気もするけど、具体的に何をしたいかというのはなくて」

父の絵を売るために身につけたPRの手法。知らず知らずの間に使命感すら抱くようになってきた。最後まで自分を見捨てなかつた最愛の父。そんな父の絵のように、力がありながらも存在を知られることなく咲く花が、地方にはある、と殿村さんは確信している。

取材・文／赤澤竜也  
撮影／水野竜也